

この機能は現在各補聴器メーカーが特に力を入れている機能です。これまでは別売りのインターフェースを使用してTV、電話、オーディオ機器と接続するだけの機能でしたが、最近急速な進化を遂げて、現在では大別すると3つの分野に広がっています。

第1はiPhoneなどの携帯電話と補聴器が直接つながったことです。これにより、携帯電話をリモコンのように使いながら補聴器の微調整が出来るようになりました（出来る内容には制限がありますが）、通話も音楽も聴くこともできます。また、携帯電話が持つGPS機能を活用して補聴器がどこにあるか調べることもできます。これは紛失したと思った時にとっても役に立ちます。

第2は「NMF I（近接場磁気誘導）」と「外部機器接続を可能にする2.4GHz」というツインリンク通信システムを搭載した補聴器が出てきたことです。昨今IoTの時代になったと言われてはいますが、補聴器もその仲間に加わる時期が来た感があります。他社に先駆けて、数あるWebサービスを連結させて相互に情報のやり取りを可能にするIFTTT（イフト）を活用できるようにしたオーティコン補聴器様は、インターネットを通じて様々な機器と接続することが出来るようになります。それぞれの機器とは別途対応する機器が必要なので具体化はこれからですが、この機能によって補聴器の利便性ははるかに向上するでしょう。他の補聴器メーカーも相次いで機能を搭載することは間違いありません。

第3は装用者が自宅に居ながら補聴器の調整を受けることが出来るようになったことです。GNヒアリングジャパン様が先駆者となったこの機能は、現在は装用者がメールなり電話で要望事項を販売者に伝え、その要望を受けた販売者が店舗内のPCで調整を行い、その後、携帯電話経由補聴器とつないだ上で補聴器の調整内容を変更するやり方ですが、近々、装用者と販売者がTV電話や携帯電話で話をしながら、リアルタイムの調整が行えるようになると思います。アフターケアの大改革と行って過言ではありません。

【360度音空間認識機能】

補聴器装用の目的は、単に音が聞こえることではなく、言葉の理解が向上することです。そのために騒音抑制とか、指向性とかいろいろな機能が開発されてきました。そして、現在注目されているのがこの機能です。装用者はいつ何時も自分の周りに存在する音源を聞いています。特にレストランとか集会などでは複数の音声が聞こえますし様々な騒音も聞こえます。従来、このような環境は補聴器を調整するのが一番難しいとされていた場面です。この機能はその最も難しい場面での音声聞き取りに焦点を当てたものと言っていいと思います。この機能を使用して聞きたい言葉の明瞭性を上げる方法は2通りあります。共通しているのは、音の種類、方向、距離感などについて、両耳通信機能も作動させて分析します。その後については2つの方法がある様に思われます。1つは、分析された音環境全体がどのような環境なのか、予め補聴器に蓄積されている音環境（例えば、騒がしい環境とか大勢の人がいる環境など）の特性と照らし合わせ、その音環境を特定したうえで全体の調整内容を自動的に切り替える方法です。特に必要なのは騒音抑制ですが、それぞれの音環境によって騒音抑制のグレードが異なってきます。もう一つは、音環境のパターンに限らず、音源一つ一つを分析し、騒音については瞬時に抑制を働かせ、音声については方向と距離を分析した上でバランスよく補聴器にお音声を届ける方法です。この方法では、聞きたい音声だけでなく、別の音声もある程度聞こえるので、360度からの聞こえの臨場感を感じることが出来ます。しかし、この機能は最近出てきた機能でまだ完全とは言えません。各補聴器メーカーが今後も研究開発を進め、精度が向上していくことが推測されます。

【両耳間通信】

この機能は補聴器を両耳装着している時に、左右の補聴器が音環境について情報交換しながら自動的に微調整をすることです。例えば、片方で認知した騒音を情報交換で反対側に伝え、即座に騒音抑制を働かせるようなことが出来ますし、逆に風切り音等、片側にしか発生しない場合は、片側だけの抑制に抑えとかの対応が出来ます。さらに、最近では、音空間全体にある音声や騒音の方向性及び距離感を分析することにも使われるようになりました。各補聴器メーカーとも、デジタルプラットフォームの高性能化が進んでいることで出来るようになりました。音空間の分析は、360度音空間認識機能と密接に絡んでいますので、重要度が増しています。補聴器の性能を比較するときに、この機能があるのかどうか確認するのも良いのではないのでしょうか？

充電式補聴器